

# 今に息づくモンゴル社会の「三つ子の魂」 — 発展と混乱のエネルギー源 —

鯉 淵 信 一

## はじめに

モンゴルは今、社会のあらゆる面でドラスティックともいえる変化を見せている。政治やビジネスのあり方が一変し、ビルが乱立して街の風景が目まぐるしく変化し、人びとの暮らしのかたちも変わった。最近のウランバートル市街を散策していると、見知らぬ国に迷い込んでしまったかと錯覚するほどの変わりように驚く。わずか20数年前の社会主義時代が遠いお伽の世界のようだ。

しかしよくよく眺めてみると、急激な変化の中で「変わらないもの」と「変わるもの」がせめぎ合いつつも、一向に変化することなく伝統的な価値観、行動原理に依って社会が動いている面が少なくないことに気付く。「変わるもの」も「変わらないもの」も様々な要因から生じているわけだから簡単に解けるとは思わないが、それを理解する鍵は何だろうか。そんなことを考えながらモンゴルを旅する昨今である。

「三つ子の魂百まで」という諺がある。言うまでもなく幼児期に形成された性格は幾つになっても変わらないということだが、これは人間個人に限らず民族についても当てはまる。各民族が長い歴史過程で風土や暮らしに合わせて培ってきた考え方は底流に流れ続けて、表層の社会がいかに変化しても頑固に「民族の三つ子の魂」として思考、行動様式に影響を及ぼすということである。民族の伝統的な価値観、行動原理であり、「民族の個性」、「民族らしさ」と言ってもいい。

日本人の日常の行動原理やそのベースにある考え方は、遠く縄文時代や弥生式水田農耕にまで遡る基層文化と根強く結びついていることは様々に論じられてきた。中根千枝『タテ社会の人間関係』、上山春平『思想の日本の特質』、土居建郎『「甘え」の構造』、芳賀綏『日本人らしさの構造』、ベネディクト『菊と刀』等々、数え切れないほどの論考がある。いわば日本人の「三つ子の魂」論である。日本社会を理解するうえで重要な視点と言っている。例えば『タテ社会の人間関係』は、日本の伝統的な価値観から現代社会の人間関係や組織、集団の特性を見事に抽出・分析してくれた。

この「三つ子の魂」の視点から眺めることで、変貌下にある今のモンゴル社会の一端が理解できるのではないだろうか。そこで信仰儀礼や習慣などではなく、変化する社会の中で底流に「三つ子の魂」が存在するのではないかと思えるものを幾つか拾って見ようと思

う。とは言うものの私に明解な解答があるわけではない。この稿は研究の裏付けがあつてのものではなく、私がモンゴル社会と接するなかで受けた印象を列挙した程度のものであり、「三つ子の魂」のほんの一面でしかない。モンゴル研究は実に幅広い分野で進められているが、社会の基本原則というべきものの研究は十分とはいえない観がある。かなり難しい問題だが、どなたかにそれを明らかにして欲しい、そんな願いを込めた一文と受け取っていただければ有り難い。

### モンゴル人にとっての「三つ子の魂」あれこれ

モンゴルの基層文化は言うまでもなく遊牧であり、モンゴル人の「三つ子の魂」はその遊牧の暮らしの中から育まれてきたことは言を俟たない。今のモンゴルがウランバートルを中心に大きく変貌しつつあるとはいえ、「三つ子の魂」は頑固に変化の底流に存在し、社会に様々な影響を及ぼしているに違いない。およそ遊牧とは縁遠い都市生活にどっぷりつかつたように見えても、遊牧で育まれた「三つ子の魂」は人びとの暮らしにしっかり根付いていると思えるのである。そうした中で私が強く「三つ子の魂」を感じる「自立」と「自由」、「移動」について考えてみる。

### 「自立・・・他に頼らない生き方」

先ずは「自立」についてである。水田農耕の小さなムラ社会が暮らしの基盤であった日本では、人びとは先祖伝来の土地で互いの距離をはかりつつ協力し合つて生きてきた。周囲とどのような関係を結ぶかが最大の関心事であり、聖徳太子の昔から「和」が尊ばれ、21世紀の現代においても盛んに「和」や「絆」の大切さが叫ばれている。子育てでも親は子供に「他人に迷惑をかけるな」、「仲良くしなさい」、「他人が見ている」、「みっともない」などと周囲との調和を口癖のように求めている。これは日本人にとって大切な「三つ子の魂」の一つだが、そこでは助け合いは強調されるが「自立」や「自由」は影が薄い。

だがモンゴルでこうした言葉を親の口から聞くことは稀である。親は子供に「自分のことは自分でやれ」と教え込む。つまり「自立しろ」、「他人に頼るな」、「早く一本立ちしろ」と求める。そして幼児の頃から自分でできることは徹底して自分でやらせる。両親が働いている家庭などでは10歳くらいの子供が食事の準備から掃除までの家事一切をまかされ、さらにその弟や妹の面倒をみるといったことは普通のことだ。最近では豊かさの中で子供の甘えを許す風潮も見られるが、それでも日本人の目で眺めていると、その徹底ぶりにハラハラさせられることが多い。「他人に迷惑を掛けるな」とも教えるが、これとて日本人が子供に諭す「他人の邪魔になるから」程度の「迷惑」とは異なり、他人に助けを求めることは相手の迷惑になるから自分でやれ、自立しろという意味合いが強いようだ。

遊牧という生業は隣り合い、寄り添っては成り立たず、人びとは離ればなれに放牧する。とりわけ大雪だ、干ばつだといった自然災害時に助け合おうと寄り合えば、少ない牧草を奪い合って共倒れを招くだけのこと、従って自然が厳しければ厳しいほど人びとは互いに距離を置いて生活する。時には家族さえも離ればなれに家畜を放牧することが余儀なくされる。平常でも雪に閉ざされた厳寒の冬、砂嵐の吹き荒れる春の暮らしは生易しいものではないが、自然災害はその最も厳しい季節にやってくる。寄り集まって暮らせるのは牧草が豊かで気候の安定した短い夏だけ。こうした暮らしの中では他者に頼ることはタブー、どんな困難も自分で乗り越えるしかない。「他人の犬は良犬だといっても、私の家の家畜は守らない」と諺もいう。そこでは精神的にも肉体的にも強靱さが求められ、その強靱さは他者に頼る生き方からは生まれてこない。「自立」こそが、草原で生き抜く絶対条件であり、子供に「自立」を求める所以である。

もちろん遊牧にも近隣で協力し合わなければならない作業は少なくない。例えば雄・雌の家畜群や子家畜を交換しての放牧、家畜の種付け、毛刈り、フェルト作り等々には協力が不可欠で「アイルを組む」とか「サーハルタ」という助け合う近隣を指す言葉もあり、助け合いは重要な徳目ではある。しかし隣り合うといっても軒を連ねるわけではなく、何キロも離れて暮らす「隣組」であり、日本のように日常的に互いの人間関係の距離をはかりながら暮らすというものとは根本的に異なる。

### 「自由・・・束縛を厭う生き方」

こうした他者に頼らない自立した生き方は、一方で他者に縛られない「自由」を尊ぶ精神を育んだ。人間関係に価値を置く日本と違って遊牧民は自然との関わりの中で生きている。自然の危険が迫ったとき耐えられるものなら留まるし、難しいと判断すればさっさと移動する。留まるも自由、移動するも自由、すべて自らの意思と決断で行動する。助け合おうと寄り合えば共倒れを招くから誰かに頼るわけにはいかないし、頼ろうともしない。そして自らの意思で選んだ道だから、結果は「天が知っている（運次第）」として深刻に思いつめることはしない。そこには人智を越えた自然の大きさに身を委ねるしかない厳しさもさることながら、自らの意思で選んだ生き方だという意識が強く働いているようだ。「気に入らない王侯に庇護されるより、子ラクダの尻を守る」とか「他人の考えで戦って勝つより、自分の考えで戦って負けた方がまし」などと諺の多くも自らの意思で生きることの大切さを教えている。時には豊かさや生活の保証よりも自由は大事だというのだ。実際、先祖伝来の土地と人間関係に縛られたムラ社会と違って、彼らは住む土地も人間関係も、そしてかつては主君さえも自分の意思で選んできたし、その自由な生き方に強いプライドも抱えてきた。一定の土地に縛られない遊牧が物理的にもそれを可能にした。

子育てでも自由は自立と並んで重視される。子供が喧嘩をする、玩具を独り占めする、ルールを破るといっても親はほとんど口出しすることはない。自分の子供が苛められていても同じだ。自分で解決しろ、自分の身は自分で守れということだ。日本に長く滞在して二人の子供を日本の幼稚園と小学校に通わせていた友人がいる。彼は日本人を見習って子供の行動に何かと口出ししていたが、帰国後、その子が周りの子供たちへの気遣いはできて優しいのだが、自己主張ができずにいつも教室の片隅に小さくなっていることに気付いた。そしてモンゴルで生まれた一番下の子にはしっかり自己主張のできる子になって欲しいので出来るだけ干渉せず、縛らずに自由にさせたいと言ったことがある。この言葉はモンゴル人の「自由」への思い、そして日本との違いを私に強く印象づけた。

モンゴル最古の古典『モンゴル秘史』の中にも「自由」の記述がある。チンギス汗が幼い頃、敵に捕らわれて九死に一生を得た際の命の恩人ソルカン・シラに恩賞を与える場面だ。チンギス汗の「恩賞を与えたいが何を望むか」との問い対して、ソルカン・シラは「恩賞を賜うとあらば、住処をば自由に住まわし給え」(村上正二訳)と、身分でも財産でもなく、自由に住まいして生きることを求めるのである。当時の人びとにとっても自由がいかに大切なものだったかが分かる。

こうした自立や自由を尊ぶ生き方は、うまく機能すれば人びとが自主的に活発に活動し、合理的で、寛容な社会を生むが、それが強く出過ぎると互いが我を突出させて自己主張し合うことになる。日本の場合は助け合いが過ぎると依存心が高まって「もたれ合い」が生まれるが、モンゴルでは自立や自由が過ぎると他者への配慮が薄れ、我が道を行く「俺が俺が」という生き方が強まって協力が欠ける世界になってしまうということだ。自立も自由も、そして日本の「和」も紙一重でプラスにもなりマイナスの働きもするわけで、適度なところがなかなか難しい。

社会主義の統制から解放された反動からか、今のモンゴルには強い自立志向とともに行き過ぎた自由が闊歩しているようにも見える。数年前から初中等教育でグループワークなどを積極的に取り入れているが、こうしたことへの危惧からであろう。

### 「移動・・・民族の血が騒ぐ」

遊牧は「移動」で成り立っているわけで、生活サイクルは移動を前提に組まれており、そこから固有の価値観を生み出してきた。日本人にとって移動は苦手だ。家の引っ越し、あるいは旅行でさえ長く家を離れることは大仕事である。「さあ引っ越しだ」、「長旅に出るぞ」となると気を引き締めないと容易に動けないが、遊牧社会では移動が日常、実に気軽に移動する。むしろ長逗留が辛いようで嬉々として移動する。移動することで心の「澱み、汚れ」が取り払われ、気分が一新するようだ。その思いは都市生活者も同じで長く一カ所に留まっ

ていると、「足の裏がムズムズする」などという。まさに「移動」は遺伝子の中に組み込まれているかのようで「移動に血が騒ぐ」という感じだ。この「移動」こそがモンゴル人の「三つ子の魂」を育む根幹にあると言っていい。

移動が前提だからモノを余分に貯えたり、重厚な家具を揃えたりしても生活を豊かにすることにも便利にすることにもならない。むしろ移動の邪魔になるだけ、いかに無駄を省くかに腐心してきた。そこから簡素さを大事にする価値観を生んだ。その「簡素さ」はモノに留まらず考え方にまで及び、複雑さを厭う合理的な生き方を育んだ。また一カ所に留まらない生業だから土地への執着は少なく、土地はあくまで仮の停泊地であって「土地神話」まで生む日本などとは土地所有の観念がまったく異なる。

もちろん遊牧は自由気ままに移動を繰り返すわけではなく、さまざまな制約の中で行なわれるものだが、しかし農事暦に沿って細かく先々までの計画を立てる農耕とは異なり、まずは「移動」が重要、移動しないことには暮らしが成り立たない。同じ土地に長く留まっていたのは牧草がなくなって家畜が飢えるだけのこと、立ち止まって綿密な計画を立てても草が生えてくるわけではない。移動先で悪天候など状況が悪化すればそこで対策を考える。そして結果は「天が知っている」として甘受する。まずは「移動」が大事、とまかく行動を起こさなくては何事も始まらないと考えるわけだ。モンゴル人の自立も自由も、そして随所に見られる「先ずは行動」の素早い決断も、こうした「移動」を重視する価値観の中から生まれてくる。

### 変化の底流に頑固に息づく「三つ子の魂」

こうした「三つ子の魂」は、大きく変化しつつある今のモンゴル社会の根底に流れ続けているのではないか？むしろ「三つ子の魂」こそが、良くも悪くも変化を押し進めているエネルギー源なのではないか？モンゴルの変わり様を眺めながら、そんな思いがよぎる。

### 「社会を変える移動」

近年のモンゴルの大きな変化の一つに、人びとの国外への盛んな移動がある。統制下の社会主義時代には容易に国外へ出られなかった人びとが、移動の自由を取り戻してパンドラの蓋が開いたように国外に職を求め、あるいは留学、観光にと続々と飛び出している。そしてこの移動こそが、社会の変化に大きな影響を及ぼしている。

2010年の国勢調査によると、外国在住モンゴル人の数は10万7000人余で実に人口の約4%を占めた。これ以外にも韓国、米国をはじめ不法滞在者が相当数いるとされており、実数はこの数字をはるかに超えるようだ。1990年の外国在住者は人口の0.3%であったから、民主化から20年余で10倍を超えたわけだ。2010年以降の実数は明らかでないが、外国在

住者はさらに増え続けているようだ。また2016年のモンゴル人の出国者数は延べ225万人にも達している。何と人口の73%が国外に飛び出した計算になる。因みに日本人出国者数は2016年に1620万人余(入管統計)、海外渡航が盛んになったとはいえ人口の10%余に過ぎない。また2016年末の日本在留モンゴル人は約7200人、うち留学生は2556人に達している。人口比で見ると、留学生数は群を抜いて世界トップだ。モンゴル人の住んでいない国を探すのが難しいくらいに世界中に飛び出している。人口わずか300万人余の国であることを思うと信じがたい数字であり、その外国志向の強さは驚嘆するほかない。まさに「移動に血が騒ぐ」といった感じだ。

こうした人びとの強い外国志向には自立や自由、移動といった「三つ子の魂」が強く作用しているのではないか。移動先での困難も不安も成否さえも後回し、先ずは飛び出すことが大事で、結果は「天が知っている」ということではないか。

いずれにせよ、こうした人びとが外国から持ち帰った知識、技術、経験が国内の活性化に大きな貢献をし、国のかたちまでも変えようとしている。モンゴルを代表するMCS社はじめMONNIS社など大手企業はもとより、成果をあげている中小企業の多くにも外国滞りからの帰国組によって起業された例が多く、その発展も彼らが支えている。またグローバル企業に引張られ、世界を駆けめぐる活躍しているモンゴル人も少なくない。こうした忙しい人びとの外国体験が衣食住はもとより暮らし向き全般、生き方、考え方にまで様々な変化をもたらしている。

一方で地方からウランバートルへの国内移動も急増している。地方で暮らしが成り立たなくなった人たちが家族ぐるみでウランバートルにやって来て、郊外の山肌にへばりつくように住みついている。ウランバートルに生活の目途があるなしに関わらず、ここでも「先ずは飛び出してみる」ということのようなのだ。1990年当時、人口約50万人であったウランバートルは2015年末で135万人にまで増加した。実に全人口の45%が狭いウランバートルにひしめいている。ゲルと家財道具を運び空地にゲルを建てれば移住完了というわけだ。10年ほど前から移住制限措置もとられているが一向に効果はない。だが移住者の多くは職にありつけずに貧しい生活を余儀なくされ、その集落が大気汚染などさまざまな問題の温床にもなっている。さらにこうした都市への移住が急増することによって地方は人口が激減し、消滅する村が続出するなどして疲弊が進み、都市と地方の有り様が国を揺るがす大問題になっている。このように「移動」は、プラス・マイナス両面にわたって社会に大きな影響を与えている。

### 「働き方にみる三つ子の魂」

モンゴルでは2016年末現在、14万1500社余の企業が登録されている(国家統計局2017

年1月)。うち84%余が従業員1～9人の小規模企業、50人以上の従業員を抱える企業は4%余ということだが、人口300万人余、また地方が今も遊牧的社会を抱えていることを考えると、この登録企業の多さには驚いてしまう。しかし内実は登録企業のうち活動しているのは51%に過ぎず、残りの49%は活動準備中、一時休業あるいは完全休業といった休眠状態である。この登録企業数の多さ、そして休眠企業の多さはどこからくるのだろうか？これも「三つ子の魂」で相当部分が理解できそうだ。

つまり綿密な計画を立てることなく、事業の成否はともかく、思いついたら「まずは起業してみる」という起業行動、その結果がこの登録企業数のようだ。4,5年働いて多少の経験を積むと、会社を辞めて起業に向かうケースも多いようで、私の周囲でも簡単に起業する知人が少なくない。倒産してもさほど落胆もしない。破たんの原因は計画が杜撰だったという反省ではなく、周囲の状況が悪かった、相手の理解が足りないなどと他に求める。結果は「天候が悪かった（運が悪かった）」程度にしか考えないわけだ。また仲間同士で起こした会社が互いに「俺が俺が」と社長の座を巡って仲間割れし、新たな会社が次々と設立されるといった例も多い。実際、私の知る仲間3人で設立した会社が、主導権をめぐる争いから3年足らずで三つの会社に分離独立したケースを身近に見ている。自立志向の強いモンゴルでは、強いリーダーがいない組織は「俺が俺が」で簡単に崩壊してしまふということだ。まさに「自立」が優先、譲り合う、協力し合うというのが何とも苦手のようだ。いずれにせよこうした企業数の多さは「我が道を行く」、「先ずはやってみる」、「結果は天が知っている」という「三つ子の魂」が如実に現れた結果のように思われる。

また企業が今、苦慮していることに従業員が定着しないことがある。勤務して3年も経たないうちに仕事が適さない、上司が気に入らないといった理由で簡単に離職するケースが実に多いという。ベテラン社員の転職志向も強いようだ。それは待遇のいい外資系企業でも有望な大手企業でも同じで、特に先の目算がなくても簡単に離職するという。日本でも短期離職が問題になっているが、その発想もレベルも日本とはずいぶん異なるように思える。強い自由、自立への意識が企業に縛られることへの抵抗感を生み、また企業への忠誠心も育まないことも要因としてあるようだ。一方で、一度退職した会社に再び出戻るといったケースも多い。私の知人で同じ会社に3度出戻ったというケースさえある。出戻る人間も、受け入れる会社も日本人には理解しがたいが、これもモンゴルの自由を求める「三つ子の魂」からくる働き方なのかも知れない。

### 「選挙にみる三つ子の魂」

モンゴルの政治の動きの中で興味深いのは、選挙のたびごとに政権交替が行なわれてきたことだ。1992年の新憲法下での初の総選挙では定数76議席中71議席を人民革命党が獲

得して圧勝したが、次の1996年総選挙では一転して民主連合側が50議席を獲得して初の政権樹立、さらに2000年にはまた一転して人民革命党が72議席を獲得した。こうした交替劇が初回総選挙から7回も繰り返されている。しかも悉く予想を覆しての結果だ。

なぜこれほどまで頻繁に政権交替が生じるのか？ 76議席中72議席という圧倒的多数を握った政権与党が十分に有利な条件を備えていながら、何故いとも簡単に敗北してしまうのか？ もちろん選挙制度や選挙区の頻繁な変更、政党への固定支持率の低さ、時の政治・経済状況、利益誘導型の選挙等々、勝敗には様々な要因があるわけで一概に断定はできないが、ここにも「三つ子の魂」が少なからず作用しているように思われる。

つまり人間関係のしがらみに縛られることの少ないモンゴル人ならではの自由な発想での投票行動が影響しているのではないか。日本では義理や人情、主義・主張にとらわれて容易に支持政党を変えられないということがあるが、人間関係に縛られることの少ないモンゴルでは権力掌握時にさまざまな縁を結び、恩恵を受けても投票行動にそれが直接結びつかないようだ。また一つの主義・主張に拘泥しない柔軟な、ある種合理的ともいえる考え方も影響しているのではないか。さらに自立と自由にプライドを抱くモンゴル人には権力への反骨があり、政権与党にありがちな驕り、公約不履行、失政などを敏感に感じ取り、気に食わないと思えばどんな縁や恩義があろうと躊躇なく支持政党を変えるということではないだろうか。自由と自立を尊ぶ「三つ子の魂」が、政策や主義・主張を越えて政権交替劇に少なからぬ影響を与えているのではないかと思うのだがどうだろう。

### 「乱立するビルを眺めて」

ザイサン・トルゴイの丘の上から新しいビルが続々と建設されているウランバートル市街を遠望して、その活気溢れる様子に驚嘆する。だが街中を散策しながら建物群に近づく、その無秩序ぶりに茫然とした思いになる。許可を受けての建設とは思えないような建築物、所構わず、好き勝手に建てているような建物群が乱立しているのだ。監視の厳しい中心部はそれなりに整った開発がなされているが、特に郊外の新興地域は無秩序な建物群が幅をきかせている。自然保護区とされているはずのボグド山の周辺までも乱開発状態だ。この数年は景気の減速で需要が落ち込み、借り手のないオフィスビルや入居者のいないマンションなどが目立つのだが、それでも建設ラッシュの勢いは止まらない。

社会主義時代にはそれなりに秩序ある街並みだったのだが、どうしてこういう状態になってしまったのか？ 都市開発計画の不備、行政管理の甘さと言えばそうなのだが、ここでも「まずは建ててみる」という発想が働いているのではないか。自己資金も持たずに親類縁者、友人たちから借金をかき集めて、突然思い立ったようにマンション建設を始めた知人にハラハラしたことがあるが、そんな例は少なくないようだ。ウランバートル市の担



当者の話だと、ほとんどの建築許可申請は建物がほぼ完成した後に提出されるという。建築許可の申請が完成後に出されるというのも理解し難いが、しかし問題のある建物でも取り壊しを命じたのはこの数年でわずかに1,2件だけだという。採算の見込みも違法性も大して気にしない、「先ずは建ててみる」というその発想に行政もお手上げのようだ。

こうした状態の街並みを車がひしめいて道路は至るところで渋滞し、その渋滞の中で車がクラクションを鳴り響かせて街は実に騒々しい。ナンバープレートによる車規制なども行なわれているが車の増加に追いつかない。ナンバープレートの偽造さえ横行しているという。交通マナーが守られていないのが渋滞の大きな要因だという調査結果があるが、まさに信号無視や割り込みなどが渋滞に拍車をかけている。まるで馬にでも乗っている気分なのか、時に舗道を走行して渋滞を抜けようとする車さえある。道路の各所にカメラを設置して違反車の取り締まりなどもしているが効果は薄い。

無秩序に乱立するビル群やクラクションを鳴り響かせてひしめく車から放たれるエネルギーに圧倒されつつ、これも「三つ子の魂」、自由がいき過ぎた姿なのかと思ったりする。

\* \* \*

夢を抱いて世界に羽ばたく人びと、豊かさを求めて首都に移住する人びと、続々と設立される企業、転職を繰り返す人びと、乱立するビル群、車の無秩序な走行ぶり等々、こうした風景からはエネルギーに変貌する一方で、混乱に喘ぐモンゴルの今を垣間見る思いがするが、このモンゴルは今後、いかなる発展の道を歩むのだろうか。その発展と変化に「三つ子の魂」がどのような影響を及ぼすのだろうか。興味は尽きない。